

2021年6月6日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「天の声を聞く」

聖書：ヨハネの黙示録18:1～8

「パクス・ロマーナ」という言葉がある。それは、ローマの平和、ローマの力による平和ということだが、その平和は、圧倒的な武力による制圧で奴隷による労働、安価な賃金による差別化された貧困層による労働において、また搾取と多額の税金、信教の不自由を強いる状況において、思想・報道の規制において国が成り立ち、統制されていく。その「パクス・ロマーナ」が真実の平和かどうか見抜いているのかと、今朝の箇所は問うている。今の時代はどのようなかとも……。

今年も6月をむかえる。沖縄戦から76年目となるが、この時期になると戦後何年と普通に日本人は使う。今年も戦後 76 年と。ただこの言葉は、日本だけで通用する言葉でアジアでは当然戦後 70 数年ということにはない。ここ沖縄でも「戦後」と呼べる状況と言えるのか？ 沖縄の芥川賞作家の目取真俊さんの著書『沖縄「戦後」ゼロ年』がある。彼は、日本が「戦後」と表現をする時に果たして近隣諸国のアジアにおいてその言葉が通用するのか。朝鮮戦争、ベトナム戦争、中国とベトナム、ベトナムとカンボジア、中国と台湾との軍事的緊張関係、ビルマ・ミャンマー軍事クーデター……。日本の高度経済成長は、このようなアジアの戦争と同時に成長し、豊かな生活が出来るようになった。そのアジア諸国の状況を見る時、日本は「戦後 60 年・70 年」と表現していいのか？

沖縄にある米軍基地からは、これまでに多くの爆撃機B52 などが飛び立ち、朝鮮やベトナム、イラク、アフガニスタンなどにおいて爆撃を加えてきた。ベトナム戦争時代に沖縄の平和団体が沢山の薬を持ってベトナムへ入り薬を届けるということがあった。当然感謝されたが、同時に「何故、沖縄の人たちは沖縄から飛び立つB52 を止めてくれないのですか」と問われた。沖縄はベトナムから「悪魔の島」と呼ばれていた。沖縄が加害者と気づかされた出来事である。日本はその事実を知っている。戦争に加担している事実はぬぐえない。日本は「戦後」という言葉を軽々しく使うことは出来ないはずだ。

今朝の黙示録は「パクス・ロマーナ」の時代、ローマの平和の時代において、真の平和とは何か問われている。富みや力に仕える生き方は、苦しみ、悲しむ人々を生み出すことになる。そのことに向き合い、気づき、神に立ち返れ、そして「天の声を聞く」者となれ、と聖書は語る。(神谷)